学生と地域を繋ぐプロジェクト
- 高齢者ケアに関するボランティア活動の実践報告 -

馬場保子[1)]　中村美香[1)]　山口智美[1)]　井上靖久[2)]

Projects that connect students with the community
-Practical report on volunteer activities related to elderly care-

Yasuko Baba[1)]　Mika Nakamura[1)]　Satomi Yamaguchi[1)]　Yasuhisa Inoue[2)]

1）活水女子大学　看護学部　　2）活水女子大学　健康生活学部

要　旨

本プロジェクトは、看護学生が地域の高齢者と交流し、地域密着型の高齢者ケアの視点を育むことを目的とした。2016 年度から 3 年間にわたり教育改革特別事業「学生と地域をつなぐプロジェクト」を立ち上げ、大村市長寿介護課と連携し高齢者ケアに関するボランティア活動を実践した。世代間交流を目的とした介護予防教室「クロスエイジング」は、2017~2018 年度の 2 年間に 13 回実施し、延べ 184 名の高齢者の参加があった。学生は、延べ 84 名参加した。参加者へのアンケートから、高齢者、学生ともに交流を楽しむことができ、満足度が高かった。活動を通して、対象に合わせた対応や教室運営の大変さを経験していた。また、高齢者の多様性を理解し、移動手段を持たない高齢者に代わって学生が地域に出向いていく必要性も学んでいた。学生が地域のリソースとして、行政や地域住民に認識されるようになったことは、3 期かけて活動を行った成果といえる。

キーワード：高齢者ケア、介護予防教室、世代間交流、認知症ケア

Ⅰ．緒言

高齢化・多死社会において、地域における高齢者ケアは喫緊の課題である。地域密着型の介護予防・認知症予防や高齢者とその家族が納得できる生き方に関心が向けられている。看護学学士課程において「地域の特性と健康課題を査定する能力」が看護実践能力の卒業時到達目標とされており（日本看護系大学協会：2018）、看護学生が地域高齢者と交流をすることによって、これらの力を育むことが期待できる（山口ら：2018）。

活水女子大学看護学部が位置する大村市の人口は 2015 年 10 月現在 92,812 人（5 年前比＋2.5%）であり、長崎県で唯一、人口が増加している。一方、高齢化率は 22.3%（5 年前比+1.9%）で、今後増加が見込まれている（第 5 次大村市総合計画 2016~2025）。

2011 年 3 月に 10 年間を計画として策定された大村市地域福祉計画「おおむら支え合プラン」（大村市地域福祉計画・大村市地域区拭き活動計画）において、高齢者の社会参加や生きがいづくりの推進を目的とした「人生ノート作

成委員会」が立ちあがった。その委員会には、2013 年度より大村市在住の看護学部の学生と一緒に参加した。委員会で作成した「大村市版人生ノート」は、2019 年 11 月までに介護予防教室の出前講座の中で 1850 部活用されている。

また、2015 年より、認知症家族会の「おおむらわらべ会」は、認知症サロン「おおむら桜」を大村アーケードで週に 1 回開催し、地域に浸透しつつある。2016 年は、認知症家族会全国大会が長崎で行われ、その大会に高齢者看護学領域のゼミ生を中心としてボランティア活動に参加した。このような活動から、活水女子大学の学生が地域において高齢者ケアを体験し、地域で生活をする高齢者との交流を行いながら、学生と地域をつなぐ土壌を構築してきた。

学生が地域包括ケアシステムに関わる機関と連携した継続的なボランティア活動を経験することは、介護予防、認知症ケアや家族ケアについて当事者と関わりながら地域社会で求められる高齢者ケアの視点を育むことにつながる。そこで、学生の高齢者ケアに関するボランティア活動を 2016 年度から 2018 年度の 3 年間にわたり教育改革特別事業「学生と地域をつなぐプロジェクト」として立ち上げ、大村市長寿介護課と連携しながら実践した。活動の実際について述べ、参加した高齢者や学生の意見をもとに本事業について考察する。

Ⅱ．取り組みの実際

1．本プロジェクトの概要

本プロジェクトは、学生と地域をつなぐプロジェクトとして 2016 年度にスタートした。学生にとっては、地域を知ることや社会活動を体験する機会となる。また、高齢者や認知症の人やその家族など当事者の声を知る機会となる。そのような体験をもとに地域における高齢者ケアの視点を育み学生の学ぶ力と実践力につながることとなる。初年度は、学生が参加できるボランティアについて、大村市長寿介護課や、おおむらわらべ会と連携し、地域の高齢者やその家族のニードをふまえながら検討を行っていった。長寿介護課からは、高齢者との交流を期待しているとの意見が上がり、世代間交流を目的とした介護予防教室を開催することを出前講座に加え、2017 年度より開催することとした。また、認知症家族会の家族会や全国大会に参加した。

「人生ノート検討委員会」や人生ノートの出前講座についても協議を行ったが、学生が参加できる時間帯の設定が難しく、学生が参加することはできなかった。

2017 年度（プロジェクト 2 年目）は、介護予防教室「クロスエイジング」の企画運営や、認知症の人と襷をつないでマラソンを行う「RUN 伴＋」に参加するなど、看護学部の学生が地域のリソースとして認識され始めた。

2018 年度（プロジェクト 3 年目）は、2017 年度同様に「クロスエイジング」を行った。

2019 年度からは、「クロスエイジング」の運営を看護学部のボランティアサークル KWIC に移し、活動を継続している。教員は大村市との窓口となっているが、ボランティア参加学生の募集や参加人数の調整、教室の企画運営などは学生が主体的に行えるようになった（図 1）。

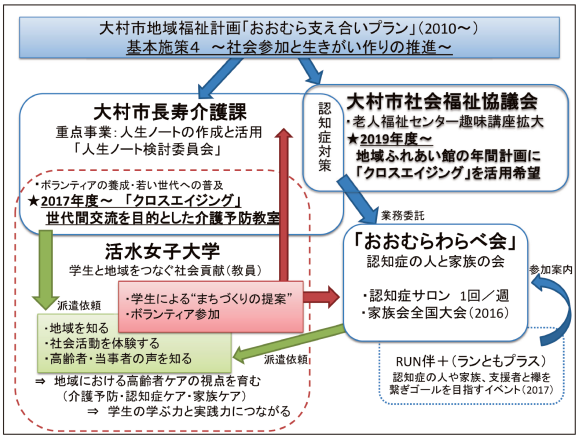

図１．本プロジェクトの概要

2．介護予防教室「クロスエイジング」の実際

クロスエイジングとは、筆者らが考案した造

語で、若者と地域で暮らす高齢者がレクリエーションやゲームなどを通して世代を超えた交流を行うことである。介護予防教室「クロスエイジング」は、学生の主体性を育む目的もあり、企画から教室の運営までを学生が行うものである。そのため、教員はあくまで長寿介護課との窓口や、学生の企画内容に助言をするように関わった。クロスエイジングは、学生が参加しやすいように夏季休暇中に限定して企画した。介護予防教室出前講座の参加団体の募集は、大村市長寿介護課が配布するチラシを用いて行った。開催場所は、申し込みがあった団体が交流活動に日頃使用している公民館などであった。学生が考案した準備体操やレクリエーションのゲーム、歌など 60 分で参加した高齢者が楽しめるような内容とした（写真１）。

３．認知症ケアに関する事業「RUN 伴＋（ランともプラス）」

この事業は、認知症の人や家族、支援者、一般の人が少しずつリレーをしながら一つの襷をつなぎゴールを目指すイベントである。認知症になっても安心して暮らせるまちづくりのために、お互いを知ること、認知症について考える機会となることを目的としている。おむらわらべ会から参加案内があり、「チーム KWASSUI」として学生と教員が大村エリアでエントリーし、横断幕を学生が作成して参加した（写真２）。.

写真１．介護予防教室「クロスエイジング」

写真２．RUN 伴＋（ランとも プラス）2017　の様子

４．評価方法

１）介護予防教室「クロスエイジング」に参加した高齢者アンケート

教室参加後に、大村市と協力して自記式アンケートを記載してもらった。内容は、年齢・性別・講座は楽しめたか、今後も受講したいか、若者に期待すること（自由記述）であった。

２）学生アンケート

本プロジェクトに参加した 1～4 年生 20 名を対象にアンケート調査を行った。内容は、地域活動について、参加しての学び、参加して感じたことであった。

３）グループインタビュー

本プロジェクトに参加した 3 年生および 4 年生 5 名に、グループインタビューを行った。対象者のうち 3 名は、2 年継続してクロスエイジングに参加し、認知症ケアに関するボランティアなどにも参加している学生であった。インタビューガイドは、①高齢者ケアのボランティア活動を通して感じたこと、②学生に何を期待されていると思うか、③高齢者が最期までいきいきと暮らすためにどのようになるとよいか、④このような活動を継続するための仕組みづくりについて、であった。

４）分析方法

アンケートについては記述統計で分析した。また、インタビュー内容は逐語録を作成し、帰納的に分析した。

５．倫理的配慮

アンケート調査やインタビュー調査は、自由

意志で行い、参加しなくても不利益がないことを文書で説明した。高齢者のアンケートは無記名で教室終了後に大村市長寿介護課が回収した。学生のアンケートは無記名で郵送法にて回収し、研究への自由参加の保証と個人が特定されないよう配慮した。なお、活水女子大学倫理審査を受けて行った（承認番号㊫16-016）。

Ⅲ．結果

１．高齢者アンケート

2017 年度から始めた「クロスエイジング」は、2018 年度まで 13 回実施し、のべ 184 名の高齢者の参加があった。内訳は 2017 年度 8 団体 115 名、2018 年度 5 団体 69 名であった。参加者アンケート結果を表 1 に示す（回収率 100%）。参加者した高齢者の 82.6%が“大変楽しめた”と回答し、“是非希望したい”、“希望したい”を合わせると 97.3%が今後も講座を希望していた。実際に、2018 年度に実施した 5 団体のうち、3 団体からは 2017 年度から継続して予約されていた。

表１．介護予防教室「クロスエイジング」参加者のアンケート結果　n＝184（回収 100%）

開催　延べ13回 ／ 参加者延べ184名（1団体 7名～33名）※		
年齢		
60歳代	15	8.2%
70歳代	82	44.6%
80歳代	74	40.2%
90歳以上	4	2.2%
未回答	8	4.3%
性別		
男性	16	8.7%
女性	149	81.0%
未回答	18	9.8%
講座は楽しかったですか		
大変楽しめた	152	82.6%
楽しめた	27	14.7%
普通	0	0.0%
楽しくなかった	4	2.2%
未回答	1	0.5%
講座を今後も希望しますか		
是非希望したい	124	67.4%
希望したい	55	29.9%
どちらでもい	3	1.6%
あまり受講したくない	0	0.0%
未回答	2	1.1%

参加者のご意見（一部抜粋）
・とても楽しかった。また交流をお願いします。
・若い人たちと楽しかったです。エネルギーをたくさんもらいました。
・何か気持ちが若くなったような気がします。
・子どもに返って楽しくできました。久しぶりに夢中になりました。
・今日のように皆が楽しんでできるようなものであれば良い。
・家では老人ばかりなので若い人とのコミュニケーションができて楽しかった。
・一年間に時々来てほしい。

※2017～2018年度 クロスエイジング開催 13回
2017年度 8回（8団体 151名），2018年度 5回（継続3団体 33名、新規2団体 36名）

２．学生アンケート

クロスエイジングには、1 回につき 3～11 名で、2017 年度から延べ 84 名の学生が参加した。2018 年度にプロジェクトに参加した 1～4 年生 20 名（うち 7 名は 2 年目）にアンケートを配布し 11 名より回収があった（回収率 55.0%）。地域活動への関心度は、必ずしも高い学生ばかりではなかったが、「高齢であっても元気で動くことができる人が多い」や、「皆さん元気で若者より活気を感じた」「元気な方だけでなく耳の遠い方や足の悪い方も参加していた」「実習に行くと高齢の方が多いが、健康な方との違いがあった」など、“参加者の発言内容から学びがあった”に、91%の学生が“そう思う”と回答し、すべての学生が、参加して満足している、またこのような機会があれば参加したいに“そう思う”と回答した（表 2）。

また、認知症ケアに関するボランティアに参加した学生は、「家族会という居場所があるのを知らなかった」「当事者の方や家族の方のことをもっと知ってほしい」「病気によるつらさや当事者のことを知ることができた」「人（地域）のつながりの深さやみんなで見守っていく必要性を感じた」など、認知症について正しく理解し、知る機会が必要と学んでいた。

表２．本プロジェクトに参加した学生のアンケート結果（n＝11）

	n（%）				
	高い	やや高い	普通	やや低い	低い
地域活動への関心度	3(27%)	5(45%)	1(9%)	2(18%)	0(0%)
	とても そう思う	そう思う	どちらでも ない	あまりそう 思わない	そう 思わない
ボランティアの機会がたくさんある	0(0%)	5(45%)	4(36%)	2(18%)	0(0%)
参加者の発言内容からの学び（気づき）	1(9%)	9(82%)	1(9%)	0(0%)	0(0%)
参加して満足している	7(64%)	4(36%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
またこのような機会があれば参加したい	6(55%)	5(45%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)

３．グループインタビュー

インタビュー時間は 62 分であった。高齢者ケアボランティアに参加した学生の学びと課題について図 2 に示す。

学生は、さまざまな参加者の身体能力を見極めながら、皆が楽しめるようなレクリエーションを企画することや、臨機応変に対応する必要性など【企画の大変さ】を経験していた。交流によって参加者とともに楽しむ体験や喜んでもらえたという【参加への満足】につながっていた。教室運営の体験から、高齢者ケアにとって必要な対象に合わせて創意工夫することを学ぶことができた。

また、高齢者の身体能力やゲームに熱心に参加する様子から身体能力だけでなく【高齢者の多様性の理解】をしていた。【若者への期待】として高齢者の方は、元気をもらうこと、つながりを求めており、「出向くことができなくても誰かとつながっていることが住み慣れた地域で生活するために必要」と、移動手段を持たない高齢者に代わって自分たちが地域に出向いていく必要性も学んでいた。

活動を継続する仕組みについて、「次の学年に引き継ぎながら繋いでいくこと」や「学生のネットワークを使うと集まりやすい」など、既存のボランティアサークルを活用することでボランティア活動に関心の高い学生が参加しやすいことがわかった。

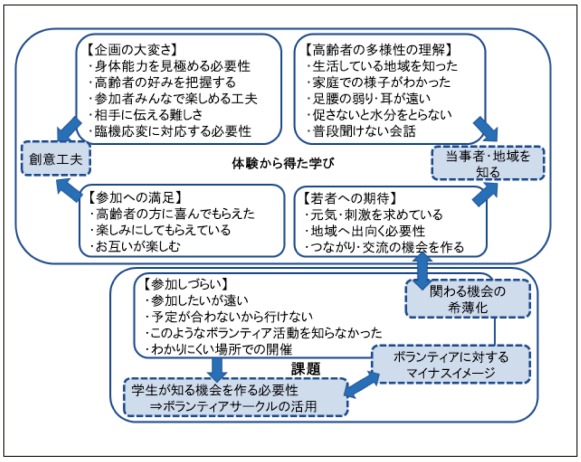

図２．高齢者ケアボランティアに参加した学生の体験から得た学びと課題（グループインタビュー）

ボランティアに【参加しづらい】要素として“参加したいが遠い”“日程が合わない”“活動を知らなかった”と考えていた学生もおり、学生がこのような活動を知る機会を作ることが必要であった。

Ⅳ．考察

学生と交流者の交流を主とした本プロジェクトは、参加した高齢者、学生ともに満足度が高い活動であった。2013 年高齢社会白書によると、60 歳以上高齢者の若い世代との交流の機会がある人の割合は、54.9%、若い世代との交流に参加したい割合は62.4%となっている。核家族化が進み、多様な高齢者の特性をありのままに受け入れることや、いきいきと生活する高齢者のイメージをする機会が少なくなっている。斎藤（2010）によると、成長の過程で高齢者と接した大学生は、そうでなかった学生と比較して「相手とすぐに打ち解けられる」などのソーシャルスキルが高いと述べている。

木下・古城（2010）は、看護学生が介護予防活動を企画・運営する教育効果として“高齢者の多様性の理解”や“関心の深まり”などがあることや、加藤・三浦ら（2015）は、地域在住高齢者と学生の世代間交流が高齢者の生きがい感を向上させることについて報告している。多田（2011）は、「世代間交流で懸け橋となる芸術や遊びは『人間と人間のコミュニケーションを豊かにする文化』であり『自己実現』を活性化してくれる大切な処方箋」であると述べている。高齢者と日常的に交流する機会が希薄化した学生にとって、世代間交流は、戸惑いながらもゲームを通してお互いを知り、楽しむ時間を共有することで満足度につながっていたとも思われる。

本プロジェクトを行う上で課題となったことは、学生への周知と参加者の日程調整であった。これまで参加学生の募集は、掲示板や高齢

者ゼミなどで行い調整していた。プロジェクトで構築した取り組みを継続させるためには、教員主導ではなく学生による主体的な活動へと発展させる必要がある。今後は、学生のネットワークを活用して既存のボランティアサークルに運営を託すことで、学生への周知や参加の呼びかけを学生が行うため、ボランティア活動に関心の高い参加者の確保が円滑に行える。また、学生が参加しやすい日程の設定なども学生が提案することが可能となる。

地域では、認知症や慢性疾患など多様な課題をもちながら人々が生活している。本プロジェクトは、主に公民館など高齢者の生活する生活圏に出向いたボランティア活動であった。そのような経験は、地域における高齢者の健康ニーズや生活の中で行われる保健活動を知る機会となった。また、様々な身体能力の高齢者が皆で楽しめるレクリエーションを考え工夫することは、異なる世代と関係性を築く査定能力の礎を築くことにつながるといえる。

大村市にある活水女子大学の学生が地域のリソースとして、行政や地域住民に認識されるようになったことは、3 期かけて活動を行った成果といえる。

研究助成

本事業は、2016 年度～2018 年度（1～3 期）教育改革特別事業「地域で育む高齢者ケアに関する事業」の助成を受けて実施した。

COI

調査・論文作成に関連し開示すべき利益相反はない。

参考文献

・加藤美穂・三浦英雄・加藤恵子（2015）：ふれあい給食が世代間交流として地域高齢者および短大生に与える効果、名古屋文理大学紀要、第 16 号、19-26.
・木下香織・古城幸子（2010）：看護学生が在宅高齢者を対象に企画・運営する介護予防活動の教育効果、看護・保健科学研究誌、10(1)、24-31.
・内閣府（2013）：高齢社会白書、第 1 章 第 2 節、５（３）若い世代との交流の機会への参加状況（参照 2019.8-1）
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/zenbun/s1_2_5_03.html
・日本看護系大学協会（2018）：看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（参照 2019.8-1）
http://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf
・大村市・大村市社会福祉協議会（2011）：大村市地域福祉計画（参照 2019.8-1）
https://www.city.omura.nagasaki.jp/fukushi/kenko/fukushi/shisaku/documents/4121515.pdf
・斎藤嘉孝（2010）：子どもを伸ばす世代間交流 - 子どもをあらゆる世代とすごさせよう - 、第 3 章 異世代と関わることの利点、59-67、勉誠出版、東京.
・多田千尋（2011）：遊びが育てる世代間交流 - 子どもとお年寄りをつなぐ - 、ウェルビーイングの多世代社会、173-180、黎明書房、愛知.
・山口智美・馬場保子・原岡智子・中村美香・井上靖久（2018）：看護職者及び看護教育に求められる高齢者看護コンピテンシーの探究 ： ローカルステイクホルダー参加型アクションリサーチ、活水論文集 看護学部編 、第 5 巻、25-35.